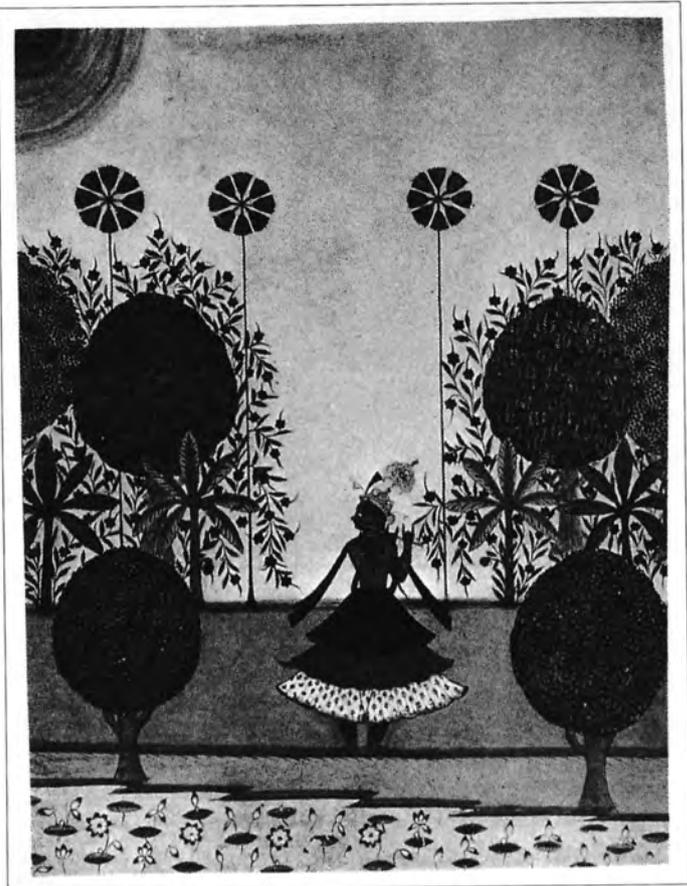


第九章 神となる道
—— タントラ



32 笛を吹くクリシュナ
ラージャスターン、マールワ(?), 18世紀半ば

(279 ページに続く)

「タントラ」(tantra)というサンスクリット語はもともと「縦糸」「はた(織機)」を意味し、そこから「枠組み」「教義」あらゆる種類の「作品」「教義書」一般を指すのに用いられるようになったものである。しかし、シャークタ派の根本教典の多くがタントラという呼び方で呼ばれることから、それらの文献をタントラと総称し、そこに見られるような性的儀礼などを行なう秘密の教えをタントリズムと呼ぶことが一般に行なわれている。

しかしながら、タントリズムをシャークタ派に限定することはその本質的共通性を無視することであり、現実的な態度とは言えない。そこで、学界における定義すら定まっていなかったわけではないが、紀元五世紀頃以後に成立した、発達したヒンドゥー教(ヴィシュヌ教・シヴァ教・シャークタ派(シヴァ教の一部と見なすべきと思われる))の聖典で、神が直接語る形式のものをタントラ文献と呼ぶことが、一般的な呼び方としては、適当であろう。

こうした文献の成立年代はほとんど不明であるが、ヴィシュヌ教では「サートヴァタ・サンヒター」「ジャヤキヤ・サンヒター」「パウシユカラ・サンヒター」などが古く、七一〇世紀にかけて作られたと推定され、シヴァ教では二元論的な聖典シヴァ派の「スヴァヤンブッヴァ・アーガマ」「キラナ・アーガマ」などが九世紀半ば以前に成立していたことが知られている。不二元論的シヴァ教やシャークタ派のタントラは、最古のもので八〇〇年頃の成立ではないかと思われるが、「スヴァッチャンダ・タントラ」「ブラフマ・ヤーマラ」などが重要である。現在よく知られているシャークタ派のタントラは新しいものが多く、有名な「マハーニルヴァーナ・タントラ」などは一八世紀後半に作られた

ことがほぼ確実である。

これらのタントラ文献の数は膨大なものであるが、その説いている主要な主題は儀礼である。もちろん教義的な要素もあるが、簡潔な場合が多く、十分な注釈なしには理解が困難である。あえて単純に要約すると、人はその本性が絶対神と異なるものではない、というのが根本的な要素である。それを実感するために、性的儀礼をも含めて様々な儀礼が行なわれるが、あらゆる儀礼の根幹にあるのが「神となりて神を供養すべし」ということである。外側からだけ儀礼を見てみると「神に供養する」部分しか見えないのであるが、実はタントリズムにおいて本質的に重要なのは「神となる」部分なのであって、ここではまさにその部分を紹介してみたいと思う。

自己の身体において行なわれる供儀

数多くあるタントラ文献のうちで、その古さを確認できるものは、アビナヴァグプタによって引用されているものが中心となる。中でも『マリーニニーヴィジャヨッタラ・タントラ』は、このカシミールの巨匠がタントラ百科事典ともいえるべき大著『タントラ・アーローカ』を書くベースとした作品である。おそらく九世紀に現形にまとめられたと推定できるこの作品は、比較的まとまった形でタントラの儀礼を記述している。

シヴァが妃の女神に語ったことを、シヴァの息子のカールツァイケーヤがそのまま聖仙たちに告げるといふ形式であるので、以下の文の主語はすべてシヴァである。

以下は、*Sri Malinivijayantara Tantra*, edited by Madhusudan Kaul Shastri, Butala & Co., Delhi, 1984, 第八章一一八〇詩節の訳である。

さて、すべての欲望を満たしてくれる供儀^(一)を述べよう。

それを見るだけでもヨーギニー^(二)たちに崇敬されるようになる儀礼である。(一)

まず始めに、清浄な土地に、丸い火壇をともなった、心地よい供儀の小屋を作るべし。(二)

〔火壇は〕すべての側(直径と深さ)が二十五単位、へそ(底にある蓮華)はその半分(の直径)、外周部(の幅)は四分の一、一単位(の幅)の形良い唇(前面の切り込み)を持つているものとする。(三)

〔六種の沐浴〕

それから、二元性に打ち勝ったマントラ智者は、精神的沐浴によって沐浴すべし。

これは、灰の沐浴等の六種であると言われる。(四)

①灰の沐浴においては、穢れを祓う沐浴のために七回マハーアストラ・マントラを唱えられた灰を、還滅^(五)の順序によって身体にかけるべし。(五)

それから、五つのアンガ・マントラを唱えられた灰によって頭から(足まで)を覆うべし。そして六アンガを伴うムーラ・マントラによって灌頂すべし。(六)

それから、衣服なしで、あるいは良い衣服を着けたままで、両手と両足を洗うべし。アーチャマナ(儀礼的口すずぎ)をしてから、マールジャナをなすべし。多音節のマントラによって、(七)

一般的ニヤーサをなし、第二の(マントラ)によってアガマルシャをなし、マリーニニー^(八)によって(太陽の)念想をなして、一音節のパラー(マントラ)を唱えるべし。(八)

②水の沐浴においてもまた、七回アストラ(マントラ)によって唱えられた土を、前と同様に身体に触れて、穢れからの沐浴を行なうべし。(九)

儀軌や沐浴等はこちらにおいても前と同様に、ただし水によって(行なうべし)。

③マントラによる沐浴のためには、マントラ智者は、共通の儀軌によって沐浴してから、三つのヴイドヤー^(一〇)を唱えられた水を頭に投じるべし。(一〇)

④牛によってたてられたほこりによって、風の沐浴をなすべし。(一一)
マハーアストラ(マントラ)を唱えながら、瞑想しつつ、七歩歩むべし。

そして再びパラパラー(マントラ)を念想しつつ戻るべし。(二二)

⑤雨天あるいは晴天に従って、同様に天的沐浴がなされる。

ただし、ここではマントラ行者はアムリタ(甘露)を滴らせるパラ(マントラ)を念想すべし。

(二三)

⑥アストラ(マントラ)によって(足の)親指の付け根から火を立ち登らせ、自らの身体を燃やし尽くすべし。それからパラ(マントラ)のアムリタによって洗い流すべし。(二四)

(その後)太陽等に(以前に置かれた)マントラを取って(自らに一体化させて)アストラ(マントラ)を唱えつつ、去るべし。

(こうして)浄く平静な(ものとなった行者は)アストラ(マントラ)によって浄められた供儀の小屋に入るべし。(二五)

(まず)そこにおいて、門の主たちを供養してから、マハーアストラを唱えられた花を、障害の鎮静のために(中に)投じるべし。(小屋が)燃え上がっているのを観想してから、(二六)

火と結び付いて火のようである供儀の小屋に入るべし。

それから、十方位にアストラ(マントラ)によって防護を作ってから、(二七)

(特別のニヤーサ)

東面あるいは北面して、特別のニヤーサを始めるべし。

そこでは、まず、時間の火に等しく輝くアストラ(マントラ)によって、(二八)

(足の)親指の先端から身体が、外側も内側も、燃やされるのを観想すべし。

その灰が、カヴァチャ(マントラ)の風によって撒き散らされるのを観想してから、(二九)

自らを、シヴァのビンドウの姿をしていると観想すべし。

それから、それに、"so'ham"という最高の(姿の)シャクティを結合すべし。(三〇)

それから、シャーンカリーよ、以下のマントラによって、ヴィドヤームールティを形作るべし。

杖(2)で始められ、(次に)大なる氣息(H)、杖(R)に乗って、へそ(KS)を伴い、(三一)

(次に)尻(M)、その下に左胸(F)、更に下に、

のど(N)、左の先端(C)、左の耳飾り(母音記号O)、(三二)

ビンドウ、半月、ナード、シャクティビンドウに飾られている。

このすばらしい集まりがナヴァートマンと知られる、女神よ。(三三)

この、すべての成就を与えるものが、秘密のかたちで述べられた。

これが、下から三つの字母を捨て去られ、六種の長母音を付け加えられると、(三四)

ジャーティの差によって、心臓等の六肢(アンガ)を形作る。

(oh)によって)輝かされ、ビンドウによって飾られた kṣa. ya. ra. va. la によって、(三五)

最初に上方の顔から順に(五つの)顔を作るべし。

それから、各肢の儀軌の成就のために、額等へニヤーサすべし。(二六)

を額に、第二(2)を額に観想すべし。

二と一を両眼に置いてから、口と口を両耳にニヤーサすべし。(二七)

「と」を両鼻孔に、おなじく「と」を両頬に、
e と ai を上下の歯に、o と au とを〔上下の〕唇に、(二八)
am を頭頂に、ヴィサルガ(am) によって舌を観想すべし。
右の、肩、腕、手、指、爪、に、(二九)

ka 系列 (ka, kha, ga, gha, na) をニヤーサすべし。左には同様に ca 以下を順に、ja 以下と la 以下は
前と同様に、尻、腿、等に〔足・指・爪〕ニヤーサすべし。(三〇)

pa 以下は、順に、両の脇腹、背、腹、心臓に、

ya 以下 (ya, ra, la, va) は、皮膚、血、肉、腱、に観想すべし。(三一)

sa 以下の五 (sa, sa, sa, ha, ksa) を、骨、脂肪、精液、プラーナ、擧丸に〔ニヤーサすべし〕。

それから、ムールティのアンガを与えてから、賢者はシヴァを呼び起こすべし。(三二)

プラーナ (H) の上にへそ (R) を、その上に右指 (H) を、

〔下に〕左の耳飾り (母音記号 C) を、これで、すべての成就を与えるシヴァとなる。(三三)

なぜなら、これが偉大なるバイラヴァの最高の本質 (サドバーヴァ) であるから。

アンガは前と同様に母音を違えて作るべし。(三四)

ムールティ、創造、三タットヴァ、八、ムールティアンガ、

アンガを伴うシヴァ、とニヤーサは六重であると讃えられる。(三五)

それから、その上に、シャクティのニヤーサをなすべし。以下のようにであると聞け。

ムールティにはパラ・パラとその顔をニヤーサして、マリーニを〔マトリカーの上に〕、(三六)

それからパラ等 (パラ・パラ・パラ・アパラ) の三を〔三タットヴァの上に〕、頭頂、心臓、足
にニヤーサすべし。

頭、顔、のど、心臓、へそ、腹部、腿、足に、順に、(三七)

アゴリー等の八 (女神) をニヤーサして、前と同様にヴィドヤアンガを、それから、すべての

ヨーガ行者によって崇敬されるシャクティを呼び起こすべし。(三八)

生命 (S)、前後にプラーナ (H)、時間の火と等しい輝き (R)、

左足 (R) に飾られ、非常に輝き (R)、頭には点 (鼻音化記号) がともない、(三九)

右膝 (R) が付いている。(四〇) これがすべての母神たちの集まりに崇敬されている〔マトリサドバーヴ

ア〕である。

すべての〔母神たちは〕これによって喜んで、欲された果を与える、(四〇)

なぜなら、これこそ母神 (マトリ) たちの最高の本質 (サドバーヴァ) と言われるから。

それ故、最高の成就を欲する賢者はこれを連誦すべし。(四一)

そこには常に、ルドラのシャクティとの合入がある。

なぜなら、これは、異なった形で呼ばれていても、最高のシャクティであるから。(四二)

タントラにおいて〔述べられている〕すべての成就是これによって成就される。このアンガは前と

同様に母音を変えて作るべし。(四三)

顔を伴うムールティ、シャクティ (マリーニのこと)、三ヴィドヤ、

アゴリー等の八、五ヴィドヤアンガ、(四四)

アングを伴うパラ・シャクテイ、とニヤースは六重と言われる。

〔シヴァの六重のニヤースとあわせて〕この二組のニヤースはすべての成就の成就のためにある。(四五)
この儀軌は、解脱の道に依る者たちによつては左道⁽³⁹⁾で行なわれるべきである。特定の果を目指す人によつては、別々に(独立して)あるいは音素とマントラを変化させて(行なわれるべきである)。

(四六)

シャンブ(シヴァ)・シャクテイ・アヌ(個我つまり普通のマントラ)を表わす様々な(マントラ)に
ついても、ニヤースは五重であると言われる。(四七)

しかし呼び起こされるべき(主要な)マントラはアングを伴つて、
第六であるべし、と、どこにおいてもこれは六重であると言われる。(四八)

〔道具の浄化〕

自分が行なうべき儀礼にふさわしいように、有と非有の観念を離れた賢者は、
すべての供儀の道具を儀軌にしたがつて作るべし。(四九)

それから、有と非有の仮構を離れ、アストラの火によつて焼かれ、

シャクテイの水に満たされて淨い闕伽器⁽⁴⁰⁾を取つて、(五〇)

なにもものであろうと浄化されるべきものを、

まさにこの手段によつて(浄化を)なすべし。(五一)

そこにおいて浄化されない何ものかがあるとは考えるべからず、

それによつてすべては浄められる、不淨のものさえも浄となる。(五二)

それを水によつて満たして、六アングとともに供養して、

〔水を〕甘露(アムリタ)となしてから、それによつてすべての道具を浄めるべし。(五三)

〔内的供儀〕

自らを供養してから、内的供儀を行なうべし、

〔これから〕私が貴女に語るように、すべてのヨーガ行者の集まりに崇拜される女神よ。(五四)

まず、支えの(アーダラ)シャクテイをへその四指下に(ニヤースすべし)。

〔その上に〕地、水、船(火)、球根(風)の四つを、(五五)

各一指、これが〔三叉〕戟の柄の握り(アーマラサーラカ)である。そこから(へそから)舌(の位

置)までの管をアナタと呼ばれる柄であると考えるべし。(五六)

この柄の上に結節がある。

網索の網の大海であるそれを貫くことなしには、マハーデーヴィーよ、(五七)

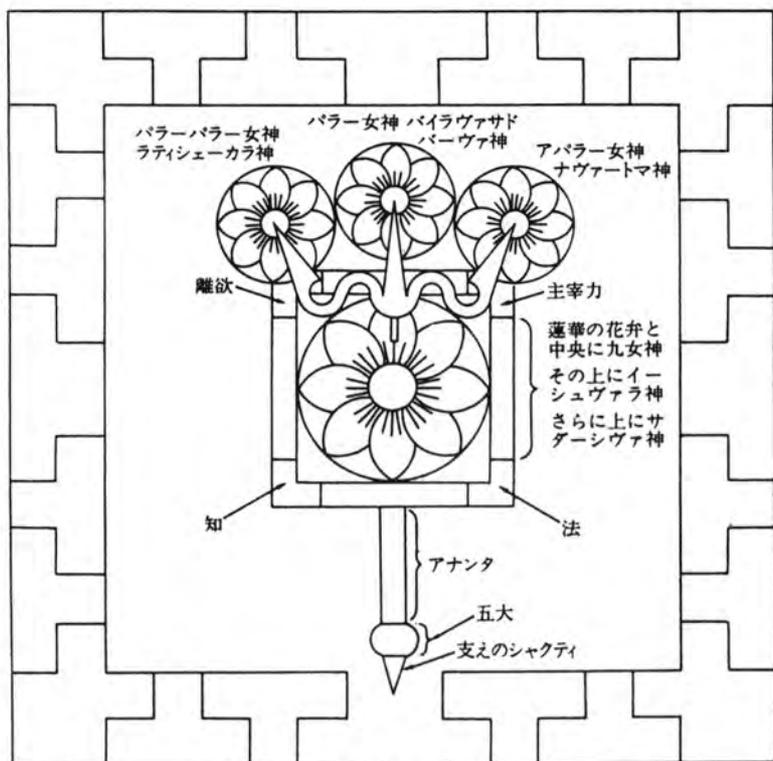
人はシヴァとの合一に達することはない。

法(ダルマ)・知・離欲・主宰力の四つを、(五八)

賢者は東南以下の四維に順に観想すべし。

東以下の四方位に四つの縁飾りを観想すべし。(五九)

結節の上、三叉の下に、四角形が観想されるべきである。



詩節(54)-(80)の内的供儀に対応する三叉戟のマンダラ
 (『マーリニーヴィジャヨーッタラ・タントラ』第9章6-31詩節に基づく)

これはヴィドヤ・タットヴァに他ならないと言われる。(これは)二つの覆いを伴っている。(六〇) 頭(頂)の穴(ブラフマランドラ)と舌との間にこのタットヴァを観想すべし。賢者は、ブラフマランドラにほかならないイーシュヴァラ・タットヴァを蓮華の姿で観想すべし。(六一) (この蓮華は)白く、花開き、花芯(雌蕊)、花糸(雄蕊)、種子を伴っている。それから、東の花弁から、ヴァーマー等の九女神をニヤーサすべし。(六二) ヴァーマー、ジェーシクター、ラウドリー、カーリー、カラヴィイカラニー、バラヴィイカラニー、(六三) ブラブラマタニー、サルヴァブータダマニー、中央にマノーンマニーと、太陽の道に従って(右廻りに)ニヤーサすべし。(六四) ヴィブ等の九女神を逆の順に観想すべし。 ヴィブ、ジュニヤニー、クリヤー、イツチャー、ヴァーギーシー、ジュヴァーリニー、(六五) ヴァーマー、ジェーシクター、ラウドリーが、すべて時間の火のように輝いているのを(東から始めて左廻りに観想すべし)。 すでに述べたようにシャクティに属する、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァが、(六六) 花弁、花糸、花芯に(それぞれ)あつて、太陽・月・火のマンダラの主宰神であると観想すべし。(六七) (その上に)イーシュヴァラを、(さらにその上に)大なる死体(マハープレータ)が、笑いつつ、意識あり、 時間の火の千万倍も美しく(輝いているのを観想すべし)。このようなすべてが玉座(アーサナ)で

ある。(六八)

彼のへそから伸びる、三本のシャクティの三叉の角を観想すべし。

頭の三つの穴から出て、ドヴァーダシャーント(53)にまで達している。(六九)

次に、その角の上に三つのシャクティの蓮華を観想すべし。

すべてを主宰し、白い(蓮華)、これが最高の玉座である。(七〇)

それから、その上に、ヴィドヤーという名の身体(ムールティ)を観想すべし。そしてまたアート

マという名の(ムールティを観想すべし)。それからそこにシヴァを本性とする、前に(述べた)ニヤ

ーサを(行なうべし)。(七一)

それから、中央にはパラ・シャクティを、左右には(残りの)二人を(観想すべし)。

(右には)パラ・パラを、本性上、赤い色をし、大いなる力を有し、(七二)

意欲(のシャクティ)の姿をし、いくぶん激しいけれども恐ろしくはない姿を観想してから、

左の角には、アパラを、恐ろしく黒赤色で、(七三)

意欲(のシャクティ)の姿をしている女神を(観想して)、

(中央には)崇拜者の苦を滅し、満ち足りさせる、パラ・女神が千億の月に等しく輝いているのを

(観想すべし)。(七四)

ムールティを始めとするシャクティの六重の(ニヤーサ)を行なうてから、(以上のような)観想を

なすべし。

その後で、五つのヴィドヤーア(55)ンガを東南以下にニヤーサすべし。(七五)

東南・東北・南西・北西、さらに南に、という順で。

(次に)シャクティのアンガとシヴァのアンガを儀軌に従って観想すべし。(七六)

ただし、東等の(四)方位に、アストラは(四維に)、ネートラは中央に、アゴーラ等の八人をアゴ

ーリー等の八女神と共に(八つの花卉の上に)瞑想すべし。(七七)

女神たちも周囲を取り巻くもの(アーヴリテイ)であるから。

外側には、武器を伴う護世神(ローカパラ)をそれぞれのマントラによって思い起こしてから、

その後連誦を行なうべし。(七八)

その(三女神の)自性に没入してから、(三女神)一人一人(のマントラ)を十回念想すべし。

燃え輝く火のような(女神を)観想してから、賢者は、護摩(ホーマ)の行法の成就のために、各

人に一つ一つ、スヴァーハーを最後にして(各人のマントラの)ウッチャーラをなすべし。(七九)

以上で(様々の)要素からなる心的供儀が語られた。(八〇)

(このような内的(心的)供儀の後で外的供儀がマンダラなりリングガに対して行なわれるが、基本的には内的供儀の繰り返しであり、ただ火壇において実際に火にバターが注がれたり、花や水などが現実用いられるという点で異なっているのみである。)

(一) 原語は *yajana*。本来は犠牲(いけにえ)を中心とする儀礼を意味するが、実際には犠牲の要素はホーマ(火の中に溶けたバターを注ぐ儀礼)においてのみ残存しているにすぎない。しかし、精神的に行なわれるこのホーマが儀礼の核心部分をなしているので「供儀」という言葉を残すことにした。

- (2) 本来的にはヨーガを行なう女性を意味するが、後には超能力を有する女性の神的存在を意味するようになった。
- (3) この場合は足から頭に向かつての意味であると思われる。
- (4) 根本マントラ、この場合はバラ・マントラであるとされる。
- (5) 一般用語としては「拭うこと、浄めること」を意味するが、術語としては、右手の上にシヴァの聖水を作ってから、それを左手に注ぎ、その聖水を頭にかける浄化の技法、を指す。
- (6) 原語は *śrī* 女性のマントラ (マントラは精神的存在であって人格を有し、女性または男性である) を意味する。ここではマートリカー (サンスクリットの五〇のアルファベット) を指すと思われる (一般的ニヤーサにかかる場合、マールジャナにかかるとする場合は不明である)。
- (7) ニヤーサとは、念を込めつつマントラを身体各部に「置く」ことであり、それによって身体は浄化変成される。
- (8) 「滅罪」の意味、ここでは、左の鼻孔から水を吸って右の鼻孔から出すことによって、体内の穢れを放出する技法を指す。「ソーマシャンプ・パツダティ」によるとマントラはアストラ・マントラである。
- (9) *pa* から始まり *pha* で終わるように特別な順序で並べられたサンスクリットの五〇のアルファベット、最重要なマントラの一つである。
- (10) 還滅の順序で、という意味。
- (11) バラー、パラバラー、アパラの三つのマントラ。
- (12) *Uvashana* 「タントラ・アローカ」においては「虚空の沐浴」と呼ばれている。晴れていれば天空に視線を注ぎながら、雨天には雨を浴びつつ、七歩行ったり来たりする。

- (13) 灰の沐浴の最後においてマリーニーによって太陽の念想を行なっている。その時マントラが太陽にあるものとして観想されていたからである。
- (14) 供儀の小屋の入口には神の像などがあるわけではないが、儀礼の場は守られなければならないので、供養することによって、入口に守護の神が勧請される。ガネーシャなどの一五柱もの神々が上下左右に配置される。
- (15) 「タントラ・アローカ」に従って、この半詩節を次の半詩節と入れ換えた。
- (16) 享受を欲するものは東面、解脱のみを欲するものは北面する。
- (17) 宇宙周期の終わりに全宇宙を焼き尽くす火。
- (18) 「鏝」のマントラ。通常は防護のために用いられる。
- (19) 「しずく」「精液」なども意味するが、この場合は、サンスクリットの文字において鼻音化の記号である文字の上に付ける点を意味する。
- (20) 「タントラ・アローカ」によれば、マントラの姿は「*on han*」である。ここで意味されているのは、まず自らを不動の状態のシヴァである「点」(ピンドゥ)と観想し、それにシャクティ(力動的エネルギー)を象徴する *pa* を加えて、*pa han* という力動性をともなったシヴァとして自らを観想することである。
- (21) シヴァの名前の一つであるシャンカラ (吉祥な) の形容詞女性形で女神を指す。韻律の調整と、シヴァが女神に語っていることを思い出させるために、このような呼びかけが時々挿入される。
- (22) 文字どおりには「マントラの身体」を意味するが、ここではシヴァの最高の現われの一つであるナヴァートマン神 (対応するシャクティはアパラ) を意味する。

(23) アルファベットのこのような表現方法は、ここでは大部分マリーニ形式のアルファベットの身体へのニヤーサに由来している(「タントラ・アローカ」xv, 121-125a 参照)。

(24) ビンドウ(点)と半月点だけで通常の鼻音化記号であり、ナーダとシャクティビンドウは鼻音化の余韻を示す。

(25) すなわち全体で、「RHRKSM LVYŪM」というのがナヴァアートマンのマントラである。ナヴァアートマンとは「九重の本性をした」という意味であるが、これはマントラの九字母に由来しているのである。

(26) 切り捨てられるのは、VYUの三つである。六種の長母音とは、*ī ī ā ai au ah* であり、ジャーティとはマントラの最後の部分で、*namah svāhā vaṅsat hum vaṅsat phai* の六種である。マントラの六肢とは、心臓 (*hṛdaya*)、頭 (*siras*)、頂髪 (*śikha*)、鏡 (*kavaca*)、眼 (*netra*)、武器 (*astrā*) の六種(ときに眼が欠けることがある)である。実際のマントラの形は、*om rhrksmlam hṛdayāya namah* などというものである。

(27) サダー・シヴァの五つの顔(イーシャーナ、タトブルシャ、アゴーラ、ヴァーマデーヴァ、サドヨージャータ)にならって、主たるマントラから五つの顔(ウアクトラ)マントラ(また「ブラフマ・マントラ」とも呼ばれる)が作られる。顔と呼ばれつつも実際には、頭 (*mūrdhan*)、顔 (*yaktra*)、心臓 (*hṛdaya*)、陰部 (*guhya*)、身体 (*mūrti*) に対応する。マントラの実際の形は、「*om kṣaṇ navātmamūrdhāya namaḥ*」、「*om yaṇ navātmavaktrāya namaḥ*」、「*om raṇ navātmahṛdayāya namaḥ*」、「*om vaṇ navātmaguhyāya namaḥ*」、「*om laṇ navātmamūrdhāya namaḥ*」となる。

(28) 「額等へ」は以下の詩節にかかる。

(29) 以上がマートリカー(アルファベット)のニヤーサである。この後に一〜二詩節欠落している

ものと思われる。

(30) ムールティすなわちナヴァアートマンの六肢が行者自身の身体に対応する箇所(鏡は胸の辺り、武器は両手)にニヤーサされる。

(31) マントラは「JhKSHŪM」という形になるが、次節で述べられるように、パラーに対応する最高のバイラヴァであるバイラヴァサドパーヴァのものである。

(32) 「OM JhKSHAM HRDAYAYVA NAMAH」など。

(33) ムールティはナヴァアートマン、創造はマートリカー(五〇アルファベット)、三タットヴァはバイラヴァサドパーヴァ、ラティシェーカラ、ナヴァアートマンの三バイラヴァ、「八」とはアゴーラ等の八バイラヴァ、ムールティアングはナヴァアートマンのアング、アングを伴うシヴァとはバイラヴァサドパーヴァ、という六種のニヤーサ。この記述から三タットヴァとアゴーラ等の八についての記述の部分が欠けているのではないかと推測される。しかしアビナヴァグプタは、ムールティアングのかわりにラティシェーカラのニヤーサを入れ、三タットヴァを、アートマ、ヴィドヤ、シヴァの三つであるとする。

(34) 本来ナヴァアートマンに対応するのはアパラである。

(35) パラー等の三女神のマントラの形式はやや特殊なので、*ś* をもとにして作ることもできるし、アングに関しては独立したヴィドヤアングが説かれている(「タントラ・アローカ」XXX, 36b-41b)。

(36) すなわち「HSHRPHREM」となる。

(37) 「マートリ」は「母」「認識主体」「音素」などを意味しうるが、直接的には広く信仰されている八女神を意味する。ただし、アビナヴァグプタは認識主体の本性という面を特に強調している。

(38) 「タントラ・アローカ」に従って訂正した。

(39) 逆の順で、すなわち、六重のシャクテイのニヤーサを先に、シヴァのニヤーサを後に。

(40) 「タントラ・アローカ」に従ってテキストを訂正した。

(41) 賓客や神に供える物、特に水がアルギヤ（「ふさわしいもの」）であり、この言葉は仏教経由で日本語に入って関伽となった。この関伽の器はこれまでに自身の身体にたいして行なったのと同じニヤーサ等によって浄化される。

(42) 六重のニヤーサ等によってシヴァと等しいものとなっている自分自身にたいして花や水を供養する。アピナヴァグプタは、これはまだ身体に対する供養であり、以下に述べられる内的供儀によってプラーナ・精神としての自身をシヴァとして供養することが行なわれると言う。

(43) ここで「指」としたのは長さの単位で、指の幅、約二センチである。

(44) 以下に述べられるのは神の供養のためにまずその玉座を身体に設定することであるが、この玉座（アーサナ）は三叉戟の形をしているものとされている。ここでは最初に戟の柄の一番下のアーマラ樹の実の形をした握りとして、すべてを支える力（アーダーラ・シャクテイ）と五大（タントラ・アローカ）は虚空が四指に遍在するとしている）がニヤーサされる。

(45) 身体の中央のプラーナ（氣息）の通るスシュムナーと呼ばれる管のこと。

(46) アナンタとはマーヤー以下の物質的世界の創造を直接に担当するマントラ主（ヴィディエイシ ユヴァラ）であるとされるが、宇宙を支える蛇も同じ名前であり、そのことも意識されているものと思われる。

(47) のどの上のところには物質的世界の源泉であるマーヤーに対応して結び目があり、ヨーガ的修行の場合にはここを通過することが大切である。

(48) ここで述べられている八つの要素は、次に述べられる四角形の台座となるものであり、ダルマ等の四つはしばしばライオンの姿で観想されるが、平面のマンダラの場合は、ダルマ等が角の□型の部分で、間をつなぐ長方形の部分で縁飾りと訳したところにあたる。四方位に置かれるのは、アダルマ（不法）等の最初の四つの反対の性質である。これらの性質は八つとも心（ブッディ）の性質として挙げられるのだが、心の本質はマーヤーであるからこの位置に置かれるとされる。

(49) 下の覆いがマーヤー、上の覆いがシュツダヴィドヤ（「三つ」とあるのを異本と「タントラ・アローカ」に従って訂正した）。

(50) 花心（かしん）・花蕊（かすい）はともに雄蕊と雌蕊の両者を指す言葉であるので、あえて俗字で花芯とあてた。蓮の花の中心の倒立円錐形の部分である。実際に観想されるのは蓮華そのものではなく図に挙げたようなマンダラである。

(51) サダーシヴァ神のことである。サダーシヴァ（永遠のシヴァ）は、シヴァの静的な様相を示し、しばしば死体として表象される。「死体」の原語はプレータ（前に赴いた者）であり、「完全に越えて往った者」と解釈されている。

(52) 聖典シヴァ派などでは玉座はここまでしかない。以下に述べられる三叉の玉座はトリカ派の優越性を示すものといわれる。

(53) 頭頂の十二指上にある千弁の蓮華からなるチャクラ。

(54) このあたりは、師から口頭で伝授さるべき秘密性の高い部分なので、注釈も詳しく説明していない。「タントラ・アローカ」によると、ヴィドヤ・ムールティがアパラ、アートマ・ムールティがパラであるらしく思われる。「シヴァを本性とするニヤーサ」は、バイラヴァサドパーヴァ、ラティシエーカラ、ナヴァートマンの三人を呼び起こし、想像上の身体をマントラによって与



ラーダーをなだめるクリシュナ

33 ラージャスターン、メーワール、17世紀半ば

「さて、夕方になって、ハリは、美しい顔の(ラーダーに)近づいて、歓喜でしどろもどろの言葉で語りかけた。彼女は、耐えがたい怒りに圧倒され、いつまでもいつまでも溜息をついたので、口の力も抜けてしまったけれども、恥ずかしそうに女友達の顔を見た。」(10.1)

えることである。

(55) 『マリーニールヴィジャヨットタラ』 III. 61b. 5で説かれている五つ(心臓・頭・頂髪・鏡・武器)でネートラ(眼)を含まない。

(56) パラー、パラーパーラー、アパラーの三女神のアンガはいずれも、に長母音を加えて作られ、ネートラを含む。

(57) シヴァのほうは、三つの蓮華によってそれぞれ異なる。「タントラ・アローカ」は内的供養の場合は中央のパラー(バイラヴァサドバールヴァを伴って)に供養するだけで他の二つにも供養を行なったことになるとしている。さらに、外的供養でない心的供養の場合は主神の供養のみで良く、周囲を取り巻くアング、アゴーラたち、護世神とその武器の供養は必要ないとしている。

(58) 中央といっても、主神と同じ位置ではなく、その上方を意味すると思われる。「ソーマジャンブ・パッタティ」などは東北としているが、これは五つの顔のうちの上方の顔を平面に展開するときには東北に置かれるからである。

(59) 一般的な用語はアーヴァラナであるが、完全な供養のときには必ず主神の他にその周囲を取り巻く神々の三重から五重の輪が供養される。

(60) しばしば護世神たちの武器は独立して一番外側の輪として供養される。

(61) 自身の精神「プラーナ(氣息)を会陰部のムーラーダラ・チャクラからドヴァーダシャーンタ・チャクラまで引き上げながらマントラを発声する技法。ここでは、溶けたバターを火に注ぐホーマの供儀になぞらえられており、自身のプラーナがバター、神が火であり、これによって、神と自身の一体化が達成されるのである。